

私には、若いころから腎臓が悪く、重度の腎不全を抱えている父がいる。父の身体には、腹膜を使用した人工透析用のチューブがお腹に取り付けられている。また、手首には血液透析用のシャントといわれる動脈と静脈を繋ぐ血管が埋め込まれている。家には人工透析をするための機械、透析液や排液を捨てるタンクなどの医療装置がある。平日の夜は腹膜での透析、土曜は血液透析、そんな生活が我が家では見慣れた光景であった。そんな父は、一級障がい者でありながら、平日は朝から夕方まで、公務員として働いている。

一般的に、「障がい」というと、知的障がいや、視覚障がい、聴覚障がいを思い浮かべる人が多いと思う。私も実際、父が障がい者手帳を持ち歩くようになってから父が「病気を抱えている人」というよりは「障がい者」であるということに気づいた。重度の病気は、障がいとは別物扱いされがちだと感じる。だが、障がい者手帳の階級では、心臓や腎臓、肝臓といった内部障がいも、障がいに含まれる。私はそのことを知ってから、内部障がいを持つ人はどうやって手を差し伸べたらよいのだろう、と考えていた。

特に父のような、病気などの内部障がいは、杖をついていたり車椅子で生活していたりしない限り外見からはわかりにくく、ぱっと見ると健常者とほぼ変わらない。父も普段は自分の足で歩いて行動しているし、透析に使われるチューブやシャントといった医療装置は、衣類で隠れていて見えない。しかし、他の人より体力が著しくない、体調が優れない時が多い、長時間立ってられないなど、助けが必要な時がよくある。

電車やバスなどの、公共交通機関を利用する際、私と母は優先的に座席を父に譲る。これは母と私が父の体を心配して、なるべく負担をかけないように配慮しているからだ。私はその時に、これは私の家族の場合だけであって、もしこれが全然知らない、他人同士だったら…とよく考える。

外見では、なにも障がいを抱えていないように見える人に、席を譲っていただけませんか、と声をかけられた時、声をかけられた側はどう感じるのだろうか。ただただ座りたいから譲ってほしい、と思われるのだろうか。それとも、声をかけられた人を外見で判断して、例えば重い荷物を持っているとか、明らかに妊婦だとか、杖や車いすを利用しているからなどの理由と思われるのか。外見で判断されたら、無視して譲らない人もいるのではないか、と考える。

父のような、見た目ではわかりにくい障がいを抱えている人は、外見からは判断しづらい。しかし、声をかけられた側が、見た目では分からないけど、体調が悪いのかもしれない、病気を抱えているのかもしれない、と気遣える人がいたら、少しでも手助けになれるのではないかと思う。

私の母は、そんな気遣いがとてもよくできる人だ。母は、小学校で特別支援教育コーディネーターとして働いており、知的障がいをもつ子どもへの教育支援をしている。知的障

が、いも内部障がいのように、外見で判断しづらい障がいである。母は常に、父を病気をサポートしながら、そんな子ども達の一人ひとりのことを考え、向き合って支援をしている。母は家でよく、自分の担当する子どもがこんなことができるようになった、こんないいところがあった、こんな場面では自分がサポートしなくちゃいけないなど、たくさんのことを私に話してくれる。私が一番印象に残っているのは、スーパーのお会計の時だ。自分のひとつ前の人が何かしらの障がいで、自分の思いを上手く言葉にできず困っている人を見た時にその人に代わって、店員さんと話して解決していた。その人の伝えたいことを理解しようと向き合い、自分から行動してゆく姿がとても偉大だった。

そんな母の姿を見た時に、私も目の前で困っている人に手を差し伸べられるようになりたいと強く感じた。父のような、たとえ外見で分かりづらい人であってもである。私の、「気遣い」への意識は、年月が経つにつれて大きいものとなった。

私は、バスや電車に乗っていて声をかけられた時、自分の座っている座席が優先席であろうがなかろうが、席を譲るようにしている。

また、ヘルプマークという、障がいや疾患などがあることが外見からは分からない人が、支援や配慮を必要としていることを周囲に知らせることで、支援や助けを得やすくなるようにつくられたマークを自分の持ち物に付けている人には、積極的に譲るようにしている。実際に父も普段使うショルダーバッグに付けているが、県によってはヘルプマークが普及していない県もあり、世間からの認知度は低いと感じる。だからこそ自分から、ヘルプマークをつけている人がいたら、助けてあげようと心がけている。

我が家は障がいへの関わりが深く、その分、自分自身で経験し学んだこと、感じるものがほとんどだ。この経験を自らの一歩の行動にし、多くの人が目の前の一人ひとりを気遣える社会にしたい。それが障がいを持っている人への、自分達ができる手助けに繋がると強く確信した。